

大阪大空襲 76年

第2次世界大戦末期、米軍によって大阪市中心部が焼き尽くされた第1次大阪大空襲から13日で76年。当時の大阪府警察局の報告書によると、3987人が死亡し678人が行方不明になった。だが、国は追跡調査をせず、どこでだれが亡くなったのか今も不明確だ。かけがえのない人の生と死に迫り、記録に残してきたのは遺族らの奮闘だった。

(朝日新聞3月13日夕刊)。

同じ日の毎日新聞夕刊1面も写真のように、「76年 昔話じゃない」と大阪大空襲を伝えている。「妹が火だるまになって死んでいった。悲しい気持ちは今も変わらない」。目を閉じると、光景がよみがえるなどと。

この記事を読んで、小山仁示『改訂 大阪大空襲 大阪が壊滅した日』新装版、

東方出版、2018年を手にとった。表紙カバーには「1945(昭和20)年3月13日の最初の大空襲から、終戦前日8月14日の大阪砲兵工廠・京橋駅への大爆撃まで、8回の大空襲を経て大阪の人口は100万人も減ってしまった。証言と警察や米軍の資料を分析して解明した大空襲の全容。地名・施設名索引を付す」と書かれている。

本書あとがきで、著者の小山仁示先生は次のように書いている。「私はこの空襲のことを、いつの日か自分の手で解明したいと思っていた。私は大阪で育ち、大阪に住み、大阪をこよなく愛している。そして、私は大阪空襲の体験者であり、近代史家である。大阪空襲の実態を明らかにすることが私の責務であると思ったとしても、うぬぼれが過ぎるとのそしりはあたらない。いや、たとえ思い上がり、うぬぼれといわれても、この仕事だけはやりたかった。」

大学院生のときに、道路公害についてお聴きするために、小山先生のご自宅に伺ったことがある。先生は道路公害だけでなく、西淀川公害についても深く関わり、『西淀川公害』を出版されている。先生の『大阪大空襲』からは、当事者であり近代史家としてのあつい思いが伝わってくる

写真は本書第2章「6月空襲の激烈性」に掲載されている「首のない赤ちゃん」の絵。行きつけの散髪屋さんで、長柄橋の空襲が話題になり、本書索引から探した。

大阪大空襲について、これからも本書などから学んでいきたい。

(2021年3月16日)

